



大阪公立大学共同出版会

No.37

NEWSLETTER

ニュースレター

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目次

- ・第13回 NPO法人大阪公立大学共同出版会総会報告 1
- ・なにゆえにOMUPがバーチャル・アーカイブを目指すのか
国際花と緑の博覧会記念協会助成金による「バーチャル常世
文庫の創設と関係資料のアーカイブ化」の意味するもの
足立 泰二 2
- ・自著を語る(25) 活断層と私たちの暮らし
ーその調べ方とつきあい方ー 伊藤 康人 3
- ・書評「活断層と私たちの暮らし」 前川 寛和 4
- ・自著を語る(26) 国家支配と民衆の力ーエチオピアにおける
国家・NGO・草の根社会ー 宮脇 幸生 5
- ・書評「生物環境物理学とはじめ」 6
- ・新刊書の紹介 6
- ・書評「メディアの青春 懐かしい人々」 6
- ・編集後記 6

第 13 回 NPO 法人大阪公立大学共同出版会総会報告

6月23日(土)午前11時より12時まで大阪府立大学B13棟において、第13回NPO法人大阪公立大学共同出版会(OMUP)の総会が開催された。総会成立の確認後、足立泰二理事長を議長に選出し、さらに上田純一常務理事と中村治常務理事を議事録署名人に指名して、議事に入った。

第1号議案「平成29年度事業報告」では、同年度に、「生物学実験への招待」を継続して出版するとともに、「獣医学の狩人たち 20世紀の獣医学偉人列伝」を出版するなど、積極的な出版事業を展開し、13点の出版を行ったこと、「読ン得本ク」執筆者へのインタビューを行い、記事としてこれをニュースレターに掲載したことなどが報告され、満場一致で承認された。

第2号議案「平成29年度事業決算」は、表に示す通りである。2名の監事より「適法かつ正確である」と署名捺印をいただき、満場一致で承認された。

第3号議案「役員等の選任」については、理事からは沼田英治氏が退任され、新しく山東功氏の就任が承認された。そして監事からは辻峰男氏と長尾謙吉氏が退任され、新しく上野山達哉氏と生田英輔氏が就任された。

第4号議案「業務契約」については、杉本公認会計士事務所との顧問契約、ホームページの維持・管理契約、事務局業務の契約、責任編集業務の委託契約のそれぞれについて、満場一致で承認された。

第5号議案「平成30年度事業計画」については、受託出版事業、出版物の受託販売事業、OMUPブックフェアの開催、出版目録の作製と配布、ニュースレターの発行(年間2回)、「読ン得本ク」の発行、ホームページの運営、OMUPサロンの開催など、おおむね前年度と同様の事業の展開に加えて、バーチャル常世文庫の創設と関係資料のアーカイブ化をはかることが、満場一致で承認された。

第6号議案「平成30年度事業予算」については、表に示す予算が提案され、満場一致で承認された。

(文責 中村 治)

平成 29 年度事業決算および平成 30 年度事業予算書

(単位:円)

科 目	H29 決算額	H30 予算額
事業収入		
書籍売上	5,897,122	5,600,000
出版収入 著者負担	4,280,473	4,200,000
〃 大学負担・出版助成等	4,251,477	4,000,000
寄付金収入	0	0
入金収入	50,000	80,000
その他の収入		
受取利息	20	10
雑収入	130,196	50,000
当期収入合計	14,609,288	13,930,010
売上原価		
期首商品棚卸	2,417,891	737,868
製作費	5,786,830	5,800,000
運送・発送費	212,992	200,000
編集デザイン料	814,625	800,000
内部仕入	27,000	20,000
期末商品棚卸	-737,868	-700,000
管理費		
雑給	2,872,327	3,000,000
福利厚生費	9,559	10,000
業務委託費	466,667	500,000
旅費交通費	483,958	500,000
通信費	72,917	80,000
交際費	79,000	50,000
会議費	33,635	33,000
水道光熱費	17,672	20,000
著者精算	1,378,121	1,400,000
消耗品費	288,176	50,000
運賃	5,355	5,000
事務用品費	33,676	35,000
広告宣伝	14,994	20,000
支払手数料	76,767	100,000
施設使用料		84,880
雑費	72,240	70,000
法人税等	70,001	70,002
当期支出合計	14,496,535	12,885,750
当期収支差額	112,753	1,044,260
前期繰越収支差額	3,706,686	3,819,439
次期繰越収支差額	3,819,439	4,863,699

なにゆえにOMUPがバーチャル・アーカイブを目指すのか

国際花と緑の博覧会記念協会助成金による

「バーチャル^{とこよ}常世文庫の創設と関係資料のアーカイブ化」

の意味するもの

OMUP 理事長

(プロジェクト代表) 足立 泰二

はじめに

OMUP設立18年、世間に先んじて特定非営利活動法人(NPO法人)に承認されてすでに13年を経過した。その間、日本の出版事情の変貌が著しい。その最大の特徴は、商業主義、経済至上主義が、学術・啓蒙書の刊行・普及を著しく阻害していることである。さらには、知的所有権と称して、新知見の隠蔽が甚だしい。学問の基本は「温故知新」であるべきで、一次資料の大切さは、言わずもがなである。一方、昨今の国内の公文書の改ざん、廃棄がいつも簡単、無責任に行われている現実を見るにつけても、怒りを乗り越えて、嘆きとも、悲鳴とも聞こえてくる。世の中、お金が無ければ何もできないという風潮がどんどん進んでいる。金さえあれば会社を乗っ取るということも横行している。結果として、政治が安易に国民を煽って、東京一極集中をどんどん進めている。グローバルな視点からしても、日本は世界標準から逸脱しているとすら言える。もっと、歴史的・文化的資産を大切にすべきである。

今ここに、好例を示す。ドイツで異例のベストセラーを何年も続けた「世界の測量 ガウスとフンボルトの物語」(原著 Daniel Kehlmann : Die Vermessung der Welt, Rowolt Verlag, 2005.)は、ミュンヘン生まれでウィーン在住の哲学及び文芸学専攻の若手学者ダニエル・ケールマンが著わした。18世紀ドイツ「知の歴史」に偉大な足跡を残した植物地理学者アレキサンダー・フォン・フンボルト(1769-1859)とカール・フリードリッヒ・ガウス(1777-1855)を取り扱っている。著者は古文書として残された多量の文献に基づいて異分野の二人を架空に出会わせるという技法で、ドイツ語圏のみならず世界の「哲学的冒険小説」に仕立て上げたのである。

近時、科学技術と人間の営為に眼を向けると、科学の原点は①観察、収集と分類であり、②抽象化と思考であること、に昔も今も変わらない。結果として、科学が広く世界の市民に受け入れられるのである。上にも触れた公文書の捏造、改ざんをはじめ、科学論文でさえ虚偽が発覚するなど、我が国の人文、社会、および自然科学の全方位の学術に向き合う姿勢に欠陥があるような気がしてならない。アーカイブこそが人類の歴史・文化遺産であり、過去の「科学文化」

の産物、オリジナルな「文物の保存と顕現化」は、学術・啓蒙出版社の究極の社会貢献といえるのではなからうか。

田中長三郎の偉業とバーチャル常世文庫の創設

今般、国際花と緑の博覧会記念協会(以下、花博協会と略記)の助成金(以後、花博記念助成と略記)を受けて、何ゆえに標題の事業展開を目論むのかについて述べよう。

南方熊楠、中尾佐助とも親交のあった世界的資源植物学者、田中長三郎の偉業を知る人は意外に少ない。若くしてアメリカ農務省に赴き、朋友スウィングル博士とともに柑橘類の分類研究に従事し、その後も宮崎高等農林学校(現宮崎大学)、九州帝国大学を経て、戦前に台北帝国大学理農学部で学術展開をした。戦後、日本に帰国し、東京農業大学、大阪府立大学の教授をも歴任した。柑橘分類の世界的権威としての偉業の数々は、現国立台湾大学図書館にTanaka Collection(田中文庫)が設立され、我が国では、わずかに国立民俗博物館内の図書館に、一部書籍が散在しているにすぎない。

実は、田中は柑橘の全国有数の産地である和歌山との縁が深く、世界の「知の巨人」南方熊楠のほか、橋本神社(海南市)の宮司前山家との3代にわたる終生の交流の実績、文献資料、及び大阪府立大学時代の師弟達との「一次資料」が集積されている。これらの国内に現存する実物資料は和歌山で一元的に恒久的保存・管理は進められているものの、田中の戦前の任地、台湾大学でのアーカイブ化と連携するとともに、「バーチャル常世文庫」として内外の公的及び私的機関・法人とも連携してこれらのweb公開をし、グローバル社会への啓発活動を展開しようというものである。

本事業の具体的展開と実施体制

事業展開の核はNPO法人としてのOMUPであって、紙媒体を介しての文化財創成である。知的財産としての一次資料の所有は、一元的に橋本神社に有するものの、収集物の調査、映像化、その分類によるアーカイブ化は強力な事業協力者に負うこととしている。すなわち、京都大学名誉教授 北島 宣氏、大阪大学総合学術博物館特任講師 伊藤 謙氏、大阪府立大学生命環境科学研究科准教授 中村 彰宏氏および

そのほかの現地和歌山の世界農業遺産候補に関与する人々の物心両面の協力があってこそである。

電子データの共有化を図る一方、紙媒体での保存性、責任所在性を担保して、①全体的統括責任（OMUP常務理事）、②現地調査および記載、説明の実務的ワーキング委員会（上記協力者を主体）、③作業グループ（調査の実働）が相互協力のもとに進める。

本事業の実施手順はほぼ次のとおりである。

1. 一次資料の現地照合と調査手順の打合せ、確認。
2. 映像データのアーカイブ搭載および簡便な説明記載。リストの作成と概要書作成。
3. バーチャル・アーカイブ完成に同調して公開討論会を開催し、書籍出版を企画。

なお、これらの事業展開においては財政的援助を首標の「国際花と緑の博覧会記念協会（略称、花博記念協会）」その他団体から得て実施するものである。関係各位の協力を多とする事に敬意と謝意を表したい。

おわりに

この小文を、個人的経験で括りたい。

若い頃から、いくつかの先進工業国での滞在型研究生活を送り、自然科学が単なる無から有を生む新発見が、世の文明・文化に寄与するのではなく、人文、社会科学との調和の

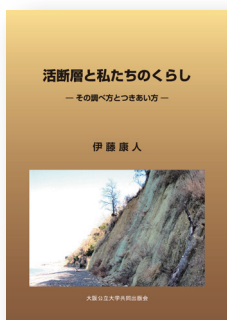
とれた学問展開をもたらし、それが社会に普及・還元されて、人類に貢献するということを実体験で得てきた。その中で、一人の著名な偉人の人生記録、伝記（自伝を含め）あるいは偶像化された小説等ではなく、一次資料にもとづく「史実」の累積こそが時代を創成することを実感したのだった。

その点から、ドイツのマックス・プランク協会（国内外の70にも及ぶMPI研究所群）のアーカイブ（独語ではArchiv, 文書館）の充実度には驚いた。時は、1980年、当時は西ベルリンのダーレム地域の緑あふれる清閑な郊外に、協会全体のアーカイブと称して、膨大な一次資料が、当時アレキサンダー・フォン・フンボルト財団の研究奨学生（所属大学では客員准教授扱い）だった、一介の若い研究者を地下の書庫に迎え入れ、戦前（当時の呼称はカイザー・ヴィルヘルム研究所群）に活躍した遺伝学研究者の文物でさえ、きちんと整理されていた。当時の給与表までもファイルされているのを知った。「温故知新」は単なる知識や教育の箴言であるのではないことを実感したのだった。

今回は「自然と人との共生」をモットーに国際コスモス賞、環境関連助成事業を展開している花博協会からの財政援助を受けた「バーチャル・アーカイブ」の創成ではあるが、今後OMUP独自の展開に進めることが出来ればOMUPの社会貢献もより一層のステップアップが可能となるであろう。

自著を語る (25)

活断層と私たちの暮らし



—その調べ方とつきあい方—

伊藤 康人 著

A5判、並製本、122頁 1,300円＋税
ISBN978-4-907209-85-8 C0044

「活断層」という言葉が一般に知られるようになった契機は、1995年の阪神・淡路大震災だったように思う。淡路島に出現した野島断層は、大地の動きを如実に示すものだった。日本列島は、その頃から地震活動の亢進期に入ったとも言われ、今に至るまで被害地震が頻発している。

私は高校で地質学に惹きつけられて以来、大地の成り立ちを知るため調査に従事して来たが、地下構造解析が縁になって、活断層評価に関わるようになった。気がつけば、過去8年間に、

3つの主要活断層系について、文部科学省の重点観測メンバーを務めている。それなりに年季が入ってきたはずだが、昨今「難しいなあ…」と感じることが多い。

難しさには二つある。まずは、活断層の調べ方である。現代の地球科学は、研究対象と分析手法の多様化に伴い、さまざまな分野に細分化されている。例えば、進化古生物学の専門家とマントルダイナミクスのプロの間に、正常な対話は成立しない。ところが、そういった風潮と裏腹に「活断層学」は確立していない。地球物理学・地質学・地形学などの研究者が、得意技を持ち寄り、活断層の実態を解明しようとする、総合科学なのである。「専門外の見識を咀嚼し全体像を総合的に把握する」ことの困難さ。鳴り物入りの国家プロジェクトの成果が、分厚い総花的データ集に過ぎないことも多い。

もっと頭が痛いのは、厳として存在する活断層と、如何につきあうか。迫り来る災害への関心が高まるにつれ、地域の地盤などについて一般向けセミナーをさせていただく機会が増えている。そういう席での代表的な質問は「で、私はどうすれば良いんでしょう?」。ケースに応じた的確な回答は大変難しいが、「それは専門じゃありませんので」などとかわすのめ卑怯だよなあ…という思

いが昂じてきた。研究分野の経験に基づいて、少しは役立つ提言ができないものだろうか。

昨年、ひょんなきっかけでOMUPと出版企画をご相談する機会があり、活断層に関する一般書を書くチャンスが訪れた。書名は、気の利いたフレーズが何も出て来なかったので「活断層と私たちの暮らし」、副題は、上述の悩みを映して「その調べ方とつきあい方」とした。執筆にあたり、まず参考になりそうな本を書店で買い漁り読もうとしたが、これが遅々として進まない。私は焦り始めた。生来の勉強嫌いが仇になったようであるが、結局「自分が読了できないものを手本にしても仕様がな」と居直ってしまった。内容のバランスより、自分が本当に大事だと思うことをきっちり書く、という姿勢を基本にして、ともかく進撃を開始した。

科学を語る時に、いわゆる文系／理系の線引きは不毛である。本書前半の「調べ方」では、高校3年生の国語力を想定して、数式を一切使わずに地下探査法を解説した。これには相当の工夫が必要だったが、石油探鉱会社で働いた若かりし頃に、技術のイロハを教わった河合展夫さん（現(株)地球科学総合研究所・社長）から、資料提供や粗稿添削など全面的なバックアップを

いただいたおかげで、なんとか仕上げることができた。

後半の「つきあい方」では、防災への取り組みに関する聞き取り調査に力を入れた。百科全書的な記述は到底できないので、エリアを大阪に限りテーマも絞り込んだが、現場で伺った話は大変面白く、重要なトピックスは掘り起こせたかなと考えている。地域の皆さんの厚意に支えられ「活断層と私たちの暮らし」は4月24日に発行された。

取材等でお世話になった方々には、お礼に本書を献呈して回った。福祉避難所に関する貴重な情報を下さった支援センター所長の杉山萬千子さん（臨床心理士・社会福祉士・精神保健福祉士）からは「私は調査の説明が特に面白かったです。大学の初めの頃、心理学の基礎的な実験論文にわくわくした感じ」というコメントを得、書いて良かったとしみじみ思った。

今回の執筆は、自分自身への問題提起であったが、この自評を書いている最中、大阪北部地震に遭遇し震度6を味わった。自然災害とのつきあいは、終わらない。国土の学問に携わる者として、より良い解答を上梓する機が再び熟する時まで、地球の営みを見つめて行きたい。（文責 伊藤康人）

書評 活断層と私たちの暮らし

book review

評者 大阪府立大学名誉教授 前川 寛和

著者は、日本海拡大や伊豆-小笠原弧の衝突等に関わる地殻変動の研究で、質の高い研究成果を多く上げてきた地球科学者である。10年ほど前に、文部科学省が主導する活断層重点観測プロジェクトのメンバーとして活断層調査に関わるようになり、次第に研究の重心がそちらに向けられるようになった。研究を進める中で、活断層研究は地域コミュニティに密着したものであるべき、という強い信条のもと、一般の人びとに活断層に関する正しい知識を伝えたい、真の防災のあり方を一緒に考えたい、という思いが著者の中で熟し切り、その思いをぶつけ一気に書き上げたのが本書である。

本書の構成は大変シンプルである。二つの章からなり、第一章は「活断層の調べ方」、第二章は「活断層とのつき合い方」で、両章ともよく練られ順序だった構成となっている。また、各節の終わりには、本文に関係したコラムが配置されている。いずれのコラムも魅力的な内容が盛り込まれており、本文との絶妙な調和を創りだしている。第一章「活断層の調べ方」では、活断層の研究手法・調査技術が紹介され、それらから得られた結果を総合的に評価することの重要性が指摘される。活断層というと、一般に地表に露出した割れ目（断層）が目されがちである。しかし、著者は、地震の揺れの強さを予想するためには、活断層の三次元的構造の全体像を把握することこそが大切であると説く。本

章では、そのための方法、すなわち、地表の地形調査、地質調査、ボーリングによる調査、物理探査の方法が順を追ってわかりやすく解説されている。第二章は、著者の研究対象である大阪を題材にして、自ら得た新たな研究成果を交えつつ、活断層とのつき合い方、すなわち地域の防災対策の現状とあり方について著者の見解を述べている。これまであまり注目されていない視点から、誰にでも退屈せず読んでもらえる、地域コミュニティに密着した活断層研究の解説本を、という著者の思いが十分に適った展開となっている。前半は、大阪の地形および地質の解説で、著者の勤務する大阪府立大学の真下に火山体が伏在していることや、天王寺付近で一旦途切れる上町断層など、著者独自の鋭い解析結果が興味深く述べられている。後半では、がらりと雰囲気が変わり、著者自らが取材した自治体での取り組みの現状が活き活きと語られる。著者自身が「手探りが続く自治体の取り組み」としているように、後半は問題提起であり、地域の特性に合わせた防災をそれぞれの自治体が構築していく上での重要な鍵を与えてくれる。

以上のように、本書は活断層を多面的にかつ総合的に捉え、活断層評価の本質をわかりやすく解いた希少な価値ある本といえる。活断層を正しく理解したい、防災に関心がある、防災業務に携わっている方々に、是非とも読んで頂きたい一冊である。

国家支配と民衆の力



—エチオピアにおける
国家・NGO・草の根社会—

宮脇 幸生 編

A5判、並製本、290頁 2,200円+税
ISBN978-4-907209-83-4 C3039

エチオピア? マラソンが、強い。むかし、飢饉があったはず。コーヒーの産地やないですか? アフリカの国やけど、どこいらへんにあんの?

ふつうの日本人には、エチオピアは、きっとこのでいどにしか知られていない。これは、そのエチオピアの、NGOについての本。めっちゃ、ニッチねらいの本ですよん。そんな声が、聞こえてきそうだ。

だがここで、はっきりと言っておこう。エチオピアはこの10年で、年平均10パーセントの経済成長を達成している。これは世界でもベスト5に入る成長率だ。国全体の人口は、アフリカ第三位、首都のアジスアベバも、人口300万人を超える。首都の周りには、環状の高速道路が作られている。毎年すごい勢いでビルが建設され、目抜き通りには、最新式の電車が走る。エチオピアへ行くのに2~3年ブランクがあると、もう何がどこにあるのかが、わからなくなってしまう。それくらい、今のエチオピアという国の動きは、早い。日本のかつてのバブル期もかくや、というほどなのだ。

この本の編者である私が、初めてエチオピアを訪れたのは、1980年代の半ばのことだった。当時のエチオピア政府は、社会主義軍事政権。首都のアジスアベバでも、5階よりも高いビルは、数えるほどしかなかった。バブルに向かいつつある日本から来ると、アジスアベバもまるで村のように見えた。

だが私の研究は、都市ではなく、地方の民族社会だった。エチオピアには80を超える民族集団があるとされる。エチオピアは西列強の植民地支配をうけたことがなく、そのためにアフリカ固有の文化がもっともよく保たれている国だと考えられていた。そしてエチオピアの周辺に分布する多様な民族社会をめがけて、世界から多くの文化人類学者が研究に訪れていた。私ももちろん、その末席に連なろうとしていたのである。

私がフィールドに選んだのは、人口5000人ほどの農牧民社会。文化人類学の教科書に書かれているような、精緻な社会システム、深い環境認知、エキゾチックな精霊憑依、そして豊かな口承伝承があった。これぞ文化人類学のフィールドワーク、という感じで、私は夢中になった。しかし、である。

研究を進めれば進めるほど、明らかになってきたことは、それが国家やグローバル化の影響を受けていない伝統的な文化ではなく、徹底して影響を受けたうえで、それに抗して維持されている文化で

はないかということだった。その証拠に、歴史記憶で語られるのは、エチオピア帝国による残酷な侵略の歴史であり、女性たちに憑依する精霊は、支配民族や西欧人（日本人の私を含む）の形をとった精霊なのだった。

私の認識は転換した。私が研究しているのは、アフリカの奥深くに残された伝統社会なのではない。国家やグローバル化の周辺に位置し、その支配や搾取を受けてきた、辺境社会なのだ。そしてこの社会と日本人の私も、世界経済システムを通じて、結びついているのだと。

辺境の社会をとらえるのにも、広い視野が必要だ。そのためには、文化人類学的な研究だけでは不十分。私は研究会でも、エチオピアの辺境を研究する人類学者だけでなく、高地人社会を研究する政治学研究者、歴史学研究者、医療研究者など、多様なフィールドの人たちと、いっしょに研究をするようになった。

一方エチオピアでは、1991年に社会主義政権が崩壊。新たに政権の座に就いたのは、北部のティグライという民族を中心とする勢力だった。この政権は、民族集団の政治的自律性を保証する民族連邦制をとる一方で、資本主義的経済を推進し、強力な経済開発を進めている。エチオピアという国家全体も大きく変化し、辺境の諸社会も、またその影響を強く受けている。

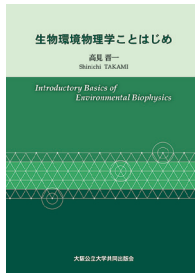
冷戦構造の崩壊した1990年代は、世界的にも大きな社会変容の起きた時代である。狭義のグローバリゼーションも、だいたいこのころを境として始まったとされることが多い。そして社会の変容には、地域社会の人々だけでなく、政府や多国籍企業、国際NGO、国内NGOなど、多様なアクターがかかわるようになった。なかでもNGOは、開発途上国において、社会変革の担い手として期待され、大きな影響力をもつようになった。エチオピアもその例外ではない。世界でももっとも変化の早い国のひとつとなったエチオピア。そのNGOの調査から、開発途上国でのNGO活動を分析する一般的枠組みが得られるに違いないいや、得られたら、いいな・・・くらいかな。そのように考えて企画したのが、この研究プロジェクトであり、この本なのである。

エチオピアのNGOについての詳しい話は、本書に書いてあるので、ここでは触れません。

で、この本は、自著として、自分の研究として、どのくらい満足のいくものなのか?あまりはっきりと点を付けてしまうと、共著者の方たちにおしかりを受けるので、それはしない。だが、まだまだ、深く追求できる点があったように思う。いろいろな課題を残しつつ、それは新たな研究プロジェクトで、あらためて取り組もうと考えています。

最後に、この本を出版するにあたって、ご尽力をいただいた大阪公立大学共同出版会事務局の皆さま、編集作業を一手に引き受けてくださった中村奈々さまに、深く感謝をいたします。

本書は、日本学術振興会科学研究費基盤研究B（海外学術調査）「NGO活動の作りだす流動的社会空間についての人類的研究——エチオピアを事例として」（課題番号25300049 2013～2016年）による研究成果をおさめたものである。



生物環境物理学ことはじめ
高見晋一著

2017年8月・大阪公立大学共同出版会発行
価格(本体1,500円+税)

評者 農業農村工学会 名誉会員 中野 芳輔

生物環境物理学は農林水産業にかかわる環境を物理学の視点からとらえようとする学問で、農業農村工学の灌漑工学、排水工学、土壌物理学、水文学などの各種専門分野に関連の深い学問の一つと言える。これまでPrinciples of Environmental Biophysics (Monteith) やAn Introduction to Environmental Biophysics (Campbell and Norman) などの著作がいくつか出版されているが、本書は物理学や数学の基礎が十分でない学生でも理解できるように、難解な数式は使用せず、語りかけるような文調で解りやすく解説されている。また国内外の著名な研究者との交流や自身の研究での試行錯誤体験などのエピソードを挿入し、知的好奇心を持続させる工夫も随所にされている。さらに面白いのは、読者がコメントや感想をメモするために各ページに広い余白を設け、書き込みやすいようにリング製本とし、読み終わったあとに読者自身に育てられた書物となるような配慮がされていることである。

本書の構成は次のとおりである。

第I部の「基本的概念」第1章～第3章では、各種単位、エネルギーと物質輸送などの話題を通して本書全体の共通基盤となる基本的概念を整理解説している。

第II部の「生産環境と一次生産」第4章～第9章では、地表付近の水文環境と植生の応答や物理環境の人為的改変などの話題を通して、本書の主題である一次生産の仕組みを物理学的視点から統一的に解説している。

第III部の「地球環境と生物圏との相互作用」第10章～第12章では、生物圏におけるエネルギーの流れと物質循環、気候変動などの話題を通して、一次生産を中心とする生物活動と地球環境のかかわりを解説している。

このように本書は生物環境物理学の基本的概念をもとに地球的規模の環境まで幅広く取り扱っている。これには、本書を通して若い学徒が「専門性のたこつば」すなわち「知の分断的深化」に陥ることがなく、分野を超えた学際的な思考方法を学習することを目指して欲しいとの筆者の願いが込められている。

かつての「蘭東事始」には蘭学導入の苦心談が記されているというが、本書のタイトルにある「ことはじめ」の語にも先人と同様な学問に対する真摯な思いと、新たな思想のテキストに挑戦する意気込みが感じられる。農学や環境科学を志す初学者のみならず、農業農村工学会の会員で本分野に関心のある皆様にも是非読んでもらいたい秀逸の書として紹介させていただいた。

※その他「生物と気象」(<http://agemet.jp/wordpress/wp-content/uploads/2018-C-2.pdf> 2018年4月10日掲載でも紹介されました。

新刊書の紹介



メディアの青春 懐かしい人々

辻 一郎 著

A5判、並製本、284頁、1,900円+税
ISBN978-4-907209-77-3 C0095



防衛機制を解除して解離を語れ

中井 孝章 著

A5判、上製本、110頁、2,000円+税
ISBN978-4-907209-78-0 C3011



はじめてみよう！家族看護

中山 美由紀 編著

A5判、並製本、60頁、900円+税
ISBN978-4-907209-79-7 C3047



サステナビリティ経営

- JISQ14001:2015及び環境マニュアル付 -

井上 尚之 著

A5判、並製本、240頁、2,300円+税
ISBN978-4-907209-80-3 C3034

book review

書評 メディアの青春(GALAC 2018年6月号より抜粋)

……著者は実に豊かな人々との出会いのなかで生きてきた。親族、友人、先輩、恩師、みな「懐かしき人々」として登場する。そうした人々との関係こそが著者の最大の財産であるが、思えば民放を魅力ある豊かな土壌として育て上げたのは、そのような人間関係とそこで蓄積された知的好奇心あるいは想像力なのである。

今、テレビ、ラジオが技術環境の変化により情報の世界における自らのポジションを再構築しようと苦戦を強いられているが、実は私たちが必要としているのは放送の機能や役割の議論というより、もちろんそれこそ基本中の基本なのだが、放送の外の、あるいは放送以前の世界との関係なのではあるまいか。

それこそ著者が若き日に生きた「懐かしき人々」との関係なのである。それは、広い意味での雑学雑知識雑関心の土壌と言っている。そうした〈雑の力〉の衰退が問題なのだ。知力は雑と混沌で育つ。初めから洗練されたものなどないのだ。

この本を読んで、そのことに気づかされる。〈いまテレビ、ラジオに欠けているものは何か〉を考えさせるだけの記録がここには溢れるほど描かれている。

「時代が違う」というのは怠慢であろう。(前田英樹)

※その他「関西民放クラブ」「民放」2018年5月号でも紹介されました。



コミュニティ防災の基本と実践

公立大学連携地区防災教室ワークブック編集委員会
大阪市立大学 都市防災教育研究センター 編

A5判、並製本、234頁、1,800円+税
ISBN978-4-907209-84-1 C1036

編集後記

残暑お見舞い申し上げます。

6月末に総会を無事に終えることができました。皆様のお蔭であると心から感謝申し上げます。今期もかわらずに鋭意努力する所存です。引き続き何卒よろしく願いいたします。

(文責 児玉倫子)